

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年6月13日現在

機関番号：32637

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23720016

研究課題名（和文） 合理的・実践的観点からの自己知論の可能性

研究課題名（英文） Possibility of the Theory of Self Knowledge from a Rational and Practical Perspective

研究代表者

金杉 武司 (KANASUGI TAKESHI)

高千穂大学・人間科学部・准教授

研究者番号：00407660

研究成果の概要（和文）：自己知にはなぜ他の種類の知識にはない「不可謬性」や「直接性」などの特徴があるのか。本研究では、この問いに対する新たな解答の試みとして近年、注目されている「合理性説」「コミットメント説」の妥当性を考察した。その結果、命題的態度の直接的な自己帰属が、主体の合理的能力と実践的能力を具現する技能知によって支えられているということ、また、それゆえ自己知は上記の特徴を示すということが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Why does self-knowledge have characteristics, such as "infallibility" and "immediacy," which are not possessed by other types of knowledge? This study examined "rationality theory" and "commitment theory," which have drawn attention in recent years as new attempts to answer this question. As a result, it has been clarified that the immediate self-ascription of a propositional attitude is supported by one's knowledge-how that realizes his/her rational and practical abilities and that this is why self-knowledge has above characteristics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：心の哲学、自己知、合理性、コミットメント、技能知、不合理性、自己欺瞞、意志の弱さ

1. 研究開始当初の背景

自己知（自分の心的状態についての知識）には、その認識は概ね正しいという意味での「不可謬性」や、その認識は自分の行動の観察やそれに基づく推論を介さないという意味での「直接性」などの特徴があると考えられる。これらは他者知（他者の心的状態についての知識）にはない特徴である。自己知にはなぜこのような特殊性があるのだろうか。心の哲学の歴史において、とりわけR・デカルト以来、多くの論者たちがこの問いに取り組んできたが、他の哲学的問題と同様に、この問いに対する解答はこれまで困難を極め

てきた。たとえば、デカルト主義的二元論の論者たちは、自己知を、「内的で非物理的な心的世界」についての唯一絶対確実な認識方法である「内観」に基づく知識として説明しようとしたが、そのために他者の心的状態は不可知の存在になり、他我問題に直面することになった。他方、他我問題を回避すべく心を行動に還元する行動主義は、自分の心的状態も他者の心的状態と同様に、行動の観察から推論を経て知られる対象として位置づけたため、自己知の特殊性の説明を放棄することになった。このように、自己知の説明という課題の達成は容易なことではない。

これに対して、近年、次のようなさまざまな新たな解答の試みが為されている。

- (1) 心脳同一説に基づき、自己知を複数の脳状態間の因果関係として捉える「内的知覚説」(D. M. Armstrong, *A Materialist Theory of the Mind*, 1968 など)。
- (2) 自らに心的状態を帰属させる言明(自己帰属言明)を文字通り自己帰属言明と認めつつ、ある種の表出としても捉える「新表出説」(D. Bar-On, *Speaking My Mind: Expression and Self-Knowledge*, 2004 など)。
- (3) 自己帰属言明の正しさを心的な語りの文法的真理として捉える「文法説」(C. Wright, *Rails to Infinity: Essays on Themes from Wittgenstein's Philosophical Investigations*, 2001 所収の諸論文など)。
- (4) 心的状態の所有条件である合理性を構成する一要素として自己知の成立を説明する「合理性説」(S. Shoemaker, *The First-Person Perspective and Other Essays*, 1996 所収の諸論文など)。
- (5) 自己知が自らのコミットメントを伴う心的状態に対する知であることに基づいて自己知の成立を説明する「コミットメント説」(A. Bilgrami, *Self-Knowledge and Resentment*, 2006 や、R. Moran, *Authority and Estrangement: An Essay on Self-Knowledge*, 2001 など)。

これらの試みは、従来の自己知論では光を当てられることがほとんどなかった自己知の側面(たとえば、「合理性」や「コミットメント」といった主体や心の実践的側面)に注目しており、その議論の射程は、単なる自己知という認識論的問題に留まらず、「自己」とは何か、「心」とはいかなる存在であるのか、といった心の哲学の根本問題にまで及ぶものであると予想される。しかし、それらの妥当性はまだ十分に検討されていない。こうした背景の下で、本研究は、これらの新たな議論が心の哲学に何をもたらしうるのかを見極める第一歩として、これらの説、特に合理性説とコミットメント説の妥当性を考察することを試みた。

2. 研究の目的

当初の研究目的は以下の通りである。

- (1) 自己知の現象学的考察：現象学的考察により、自己知とはそもそもどのような現象であるのかを明らかにする。そして、従来の議論で自己知の特殊性として挙げられている「不可謬性」や「直接性」などが自己知の必然的特徴である点に自己知の特殊性があることを明らかにする。
- (2) 「内的知覚説」「新表出説」「文法説」の明確化と批判的検討：「内的知覚説」「新表出説」「文法説」がどのような立場であるのか明らかにする。そして、それらの立場では、(1)

で確認された自己知の特殊性(自己知の必然的特徴)を十分に説明することができないことを明らかにする。

- (3) 「合理的実践的観点からの自己知論」の可能性の検討：「合理性説」と「コミットメント説」が着目する「合理性」と「実践性(行為者性・コミットメント性)」が自己知の特殊性(自己知の必然的特徴)を説明する鍵であることを明らかにする。しかし、「合理性説」「コミットメント説」がどのような立場であるのかは必ずしも明確ではないことを明らかにし、あるべき「合理的実践的観点からの自己知論」の姿を探究する。
- (4) 「合理的実践的観点からの自己知論」の課題の明確化：(3)で定式化される「合理的実践的観点からの自己知論」が直面する課題を明らかにする。まず、心的状態の内容は主体の内部状態だけでなく、自然的環境や社会的環境などの外部状態によって決まるとする「外在主義」の見解と自己知の特殊性が両立可能なものかどうかは、(3)で定式化される限りでの「合理的実践的観点からの自己知論」では必ずしも明らかではない。本研究では、この点を明らかにする。また、この自己知論が、あくまでも「合理的実践的観点」からの自己知論である限りで、その観点からは捉えきれないように思われる知覚的・感覚的経験の自己知をも十分に説明できるのかどうかという点も明らかにする。

3. 研究の方法

- (1) 自己知の現象学的考察や、「内的知覚説」「新表出説」「文法説」「合理性説」「コミットメント説」の明確化および批判的検討の準備に必要な文献調査と学会参加を行い、論点を整理する。これらの諸説に関する文献としては、先に挙げた

D. M. Armstrong, *A Materialist Theory of the Mind*, 1968

D. Bar-On, *Speaking My Mind: Expression and Self-Knowledge*, 2004

C. Wright, *Rails to Infinity: Essays on Themes from Wittgenstein's Philosophical Investigations*, 2001 所収の諸論文

S. Shoemaker, *The First-Person Perspective and Other Essays*, 1996 所収の諸論文

A. Bilgrami, *Self-Knowledge and Resentment*, 2006

R. Moran, *Authority and Estrangement: An Essay on Self-Knowledge*, 2001

などの他にも、それらの文献に関する二次文献も広く収集し、参考にする。また、これらの文献には、自己知の現象学的考察も多く含まれている。本研究では、それらの考察も参

考にするとともに、認知科学等の経験科学的研究の成果も、文献および学会を通じて参考にす。その理由は、それらの経験科学的研究により、従来の自己知の現象学が訂正される可能性も大いにあるからである。本研究では、より広い観点から自己知の現象学的考察を行いたいと思う。

(2) (1)の成果を、国内の研究者と開催する研究会等で批判的に検討した後まとめる。

(3) (1)(2)の成果をもとにして、「合理的実践的観点からの自己知論」の定式化と課題の明確化を行うため、まずその準備に必要な文献調査と学会参加を行い、論点を整理する。参考にす文献としては、(1-1)に挙げた文献の他に、G. Evans, *The Varieties of Reference*, 1982やB. Gertler, *Self-Knowledge*, 2010、さらにそれらの文献に関する二次文献も広く収集す。また、(フッサールに由来する学説としての)現象学の分野からも、D. Zahavi, *First-person thoughts and embodied self-awareness: Some reflections on the relation between recent analytical philosophy and phenomenology*, *Phenomenology and the Cognitive Sciences* 1, 2002, 7-26 などを中心に文献を収集し、参考にす。

(4) (3)の成果を、国内の研究者と開催する研究会や学会のワークショップ等で批判的に検討した後まとめる。

(5) 研究課題の明確化の際には、心の哲学の研究者だけでなく(フッサールに由来する学説としての)現象学の研究者とも積極的に対話していく。

4. 研究成果

(1) 初年度の研究成果は以下の通りである。

①第一に、「合理性説」と「コミットメント説」がどのような立場であるかを明確化し、「合理的・実践的観点からの自己知論」のあるべき姿を探究した。具体的には、命題的態度の自己帰属は、主体が合理的能力と実践的能力を持つということを具現する技能知によって支えられていると考えるのが、あるべき「合理的・実践的観点からの自己知論」であるということが明らかになった。また、命題的態度の自己帰属がそのようなものであるがゆえに、自己知は「不可謬性」や「直接性」といった特徴を示すという説明が成立することが明らかになった。この研究成果は、金杉武司「自己知・合理性・コミットメント—英語圏の心の哲学における自己知論の現在—」(『現象学年報』27 日本現象学会編 2011 年所収)において発表された。

②第二に、以上のような自己知論と、D. Zahavi らによる現象学的自己知論を比較し、両者の関係性を探究した。具体的には、以上の自己知論では、現象学的自己知論が中心的

に扱う知覚的・感覚的経験についての自己知が十分に捉えられないのに対して、以上の自己知論が扱う自己知の合理的側面や実践的側面は、現象学的自己知論では十分に捉えられていないことも明らかになった。この研究成果もまた、金杉武司「自己知・合理性・コミットメント—英語圏の心の哲学における自己知論の現在—」(『現象学年報』27 日本現象学会編 2011 年所収)において発表された。

③第三に、以上の研究で明らかになった自己知と合理性の関係に基づいて、不合理な心のあり方の一例である自己欺瞞と自己知および自己の関係について考察した。具体的には、自己欺瞞的信念を所有する主体に自己知が欠如していること、それゆえそのような主体には部分的に自己の分裂が生じているということが明らかになった。この研究成果は、金杉武司「自己欺瞞のパラドクス」(認知哲学研究会 2011 年 11 月 12 日)において発表された。

(2) 最終年度の研究成果は以下の通りである。

①第一に、初年度の研究で明らかになった自己知の合理的側面や実践的側面の理解に基づいて、初年度に引き続き、不合理な心のあり方の一例である自己欺瞞と自己知および自己の関係について考察した。具体的には、自己欺瞞的信念を所有する主体には、自己知が欠如しているがゆえに自己の分裂が生じているということ、それゆえ、自己欺瞞を「自らを欺くこと」として理解する伝統的枠組みでは、自己欺瞞を文字通り「自己欺瞞」として理解できなくなるという「パラドクス」が生じるということ、しかし、自己概念が多面的であることを理解すれば伝統的理解の下で部分的にパラドクスを回避できるということが明らかになった。この研究成果は、金杉武司「自己欺瞞のパラドクスと自己概念の多面性」(『科学哲学』45-2 日本科学哲学会編 2012 年所収)において発表された。

②第二に、同じく不合理な心のあり方の一例である意志の弱さについて考察した。具体的には、意志の弱さが示される意志の弱い行為をあくまでも自由な意図的行為として理解するためには、行為の動機づけは一般に、実践的推論の合理性によって説明されるべきであるということが明らかになった。この研究成果は、金杉武司「行為の反因果説の可能性—意志の弱さの問題と行為の合理的説明—」(『哲学』63 日本哲学会編 2012 年所収)において発表された。

③第三に、本研究で考察している自己知論のように、合理的・実践的観点から「心」を理解すべきであるとするならば、そのような心の理解と、心についての経験科学である行動科学(心理学)との関係はどのようなものとして理解されるべきかを考察した。結論とし

ては、行動科学が、現象を予測し、制御するという科学的な実践の眼目を有しているのに対して、合理的・実践的観点からの心の理解は、賞賛や非難といった社会的実践の前提を成すという意味で社会的な実践の眼目を持つがゆえに、このような心の理解は、行動科学から独立に成立するものであることが明らかになった。この研究の成果は、金杉武司「行動科学の哲学—行動科学の多様性とインターフェース問題—」(『行動科学』51-2 日本行動科学学会編 2013 年所収)において発表された。

④第四に、合理的・実践的観点からの自己知論では十分に捉えることができないと考えられる知覚的・感覚的経験の自己知に関する考察の前提として、知覚的・感覚的経験に特有の「クオリア」の本性に関する考察を行った。知覚的・感覚的経験は、合理的・実践的観点から捉えられる命題的態度とは一線を画するがゆえに、この限りでは、行動科学の研究対象の一つである脳の状態に還元可能であるという可能性が残るが、いわゆる「説明ギャップ論証」により、この還元の説明が得られない限りはこの還元可能性を積極的に支持すべき論拠はないということが明らかになった。この研究の成果は、金杉武司「タイプ B 物理主義と説明ギャップ論証は論駁されたのか？」(京都現代哲学コロキウム例会 2012 年 12 月 8 日)において発表された。

(3)本研究の意義および今後の展望については、以下の通りである。

①合理的実践的観点からの自己知論は、従来の心脳同一説のように心を脳に還元しようとする立場とは異なり、従来はあまり強調されることのない心の合理性・実践性に光を当てている。本研究は、心が示すさまざまな現象そのものをできる限り正確に捉えるという意味での「現象学」に基づいて、この点を明らかにしている点で、「現象学」的方法の意義の再考を促すという役割も果たしていると考えられる。

②他方、合理的実践的観点からは知覚的・感覚的経験についての自己知を十分に捉えることができないように思われるという点で、本研究のアプローチには限界もあると考えられる。より包括的な自己知論を展開するために、合理的実践的観点とは異なる観点からの考察を今後の課題としたい。

③また本研究では、自己知の特殊性と外在主義の両立可能性についての考察もほとんどできなかった。合理的実践的観点からの自己知論には②に挙げたような限界があるが、この観点からの考察により、この両立可能性問題についての新たな論点が見つかる可能性は十分にある。それゆえ、この問題領域に関しては、合理的実践的観点からの自己知論の可能性をさらに検討していく必要があると

考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

①金杉武司、行動科学の哲学—行動科学の多様性とインターフェース問題—、行動科学 (日本行動科学学会)、査読有、51-2 巻、2013 年、135-42

②金杉武司、自己欺瞞のパラドクスと自己概念の多面性、科学哲学 (日本科学哲学会)、査読有、45-2 巻、2012 年、47-63

③金杉武司、行為の反因果説の可能性—意志の弱さの問題と行為の合理的説明—、哲学 (日本哲学会)、査読有、63 巻、2012 年、201-216

④金杉武司、自己知・合理性・コミットメント—英語圏の心の哲学における自己知論の現在—、現象学年報 (日本現象学会)、査読無、27 巻、2011 年、11-21

〔学会発表〕(計 4 件)

①金杉武司、タイプ B 物理主義と説明ギャップ論証は論駁されたのか?、京都現代哲学コロキウム (例会・山口尚『クオリアの哲学と知識論証—メアリーが知ったこと—』合評会)、2012 年 12 月 8 日、キャンパスプラザ京都

②金杉武司、自己欺瞞のパラドクスと自己概念の多面性、科学基礎論学会 (秋の研究例会・ワークショップ)、2012 年 11 月 3 日、東京大学

③金杉武司、行動科学の哲学—行動科学の多様性とインターフェース問題—、日本行動科学学会、2012 年 9 月 10 日、東邦大学

④金杉武司、自己欺瞞のパラドクス、認知哲学研究会 (東京大学グローバル COE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP) 関連イベント)、2011 年 11 月 12 日、東京大学

〔図書〕(計 1 件)

①科学・技術・倫理百科事典翻訳編集委員会 (編)、丸善出版、科学・技術・倫理百科事典、2012 年、46-7, 133-5, 845-6, 1122-5, 1795-7, 2295-7, 2403-7

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金杉 武司 (KANASUGI TAKESHI)
高千穂大学・人間科学部・准教授
研究者番号：00407660

(2) 研究分担者

なし

(3)連携研究者
なし